

日本事情的授業における多文化理解のための教室活動

—ブレインストーミングの手法を用いて—

In-class Activities for Learning Multiple Cultures :
Brainstorming Method in the Class of Japanese Culture and Society

印道緑 (北九州市立大学)

INDOH Midori (The University of Kitakyushu)

要 旨

ブレインストーミングとは少人数のグループによって自発的にアイデアを生み出していき、課題を達成するための活動である。一般的には最終の目標があり、その目標達成のためのウォーミングアップの活動と位置付けられることが多い。ここでは「異文化講読」という日本事情的授業において、討論で留学生に独創的なアイデアを出させ、最終的に多文化理解を促進するための方法としてのブレインストーミング的活動を中心に述べる。

Brainstorming refers to activities that allow a small group of students come up with ideas spontaneously and complete their assignments. Generally, there is a final goal to accomplish, and brainstorming is often considered a “warming up” activity to achieve this objective. In this paper, I will discuss brainstorming methods I apply to make students discuss creatively and finally to facilitate students’ understanding of multiple cultures in the class of Japanese culture and society.

【キーワード】 読解, ブレインストーミング, アイデア, スキット, 課題達成,

1. はじめに

グループワークを授業の活動として取り入れる際の問題の一つは、必ずしもグループのメンバー全員が均等に討論に加わっていない場合が生じることだ。極端な場合はある学生が中心になって話し、ほかの学生はほとんどその学生のいうことに従っているということもある。私が担当している「異文化講読」という授業では、まず、日本社会・文化に関する読解を行った後、その内容やテーマについてグループに分かれて討論し、その内容をグループ発表という形で全員で共有する。その後、全員による質疑応答で異文化への理解を深めていくという方法で進めていたが、やはり、グループワークを行うにあたっては、メンバー全員がトピックに対して共通の興味を持たず、積極的に討論に参加していない場合があるという問題を抱えていた。

なんとかグループのメンバー全員がその内容に興味を持って自発的に発話し、他のグループに伝えようとする意欲を持って活動できないものかと考えていた時に出会ったのがブレインストーミングという方法だった。

ブレインストーミングとは、一言で言うと、少人数のグループによって自発的にアイデアを生み出し、それを蓄積していき、最終的にある課題を達成するための方法である。ラプトン (2012: 4) はブレインストーミングについて「アイデアを探るための第一歩として有効な自由形式の発想法であり、課題をあぶり出して解決し、思考の幅を広げるのに役立つ。1950年代に考案されたブレインストーミングはクリエイティブな発想を促す技法とし

て急速に広まり、自らをクリエイティブでないと考える人に対しても効果を発揮した。」と述べている。もとはと言えばビジネスやデザインの発想を得るための技法として考えられたブレインストーミングだが、これは日本語教育にも利用できるのではないかと思ひ、その活用法を工夫してみた。すでに英語教育 (ESL/EFL) ではスピーキングやライティングなどあらゆる学習のプロセスにおいてブレインストーミングの効用が認められつつある^(注1)。

本論では、おもに日本社会・文化に関する読解の授業を前提として、どのような課題をどのようなブレインストーミングの手法を使って達成したかを、そのプロセスに焦点を当てて記述する。

2. 実践の概要

2-1. 「異文化購読」の内容と目的

「異文化購読」は読解に基づく日本事情的授業の内容となっており、その目的は以下の2点である。

- 1) 第一に、様々な読解によって日本の社会・文化あるいは留学生の自国、他国の文化やものの考え方の共通点、相違点を発見することである。
- 2) 第二に、ブレインストーミングの手法を用いて、例えば「～人は・・・だ」という一つの視点だけでなく、多様な視点を獲得することで、社会、文化への柔軟な考え方ができるようになることである。具体的には、日本社会・文化に関係のある文章、もしくは小説等の読解の後、各学期末にそれぞれ1回ずつブレインストーミングの手法を使ったグループワークの形で企画、制作、発表をするという創造的な課題を与える。

2-2. 授業の対象

対象となる学生は以下の通りである。

- 1) 受講留学生数は15人程度。中国、韓国、イギリス、オーストラリアの4カ国から交換留学生として派遣された短期(1年もしくは半年)在籍の留学生である。
- 2) 日本語レベルは中級以上(総学習時間400時間程度以上)で、総学習時間が300時間に満たない初級の留学生は読解についていけないため、外した。
- 3) 中級から上級まで受講留学生の日本語能力に差があるため、日本人の学生ボランティアを募集し、各グループに最低1人は入ってもらう。日本人学生は単なる語学学習ヘルパーとしてのみでなく、留学生と対等に日本文化や社会についての討論等にも参加する。留学生の感想によると、日本人学生と目的をもって話せるということが留学生の興味、意欲を喚起しているという一面があるようだ。

2-3. 1学期目^(注2)の内容

1学期目は主に多文化理解のための教室活動を以下のプロセスで行い、完成した紙芝居を様々なゲストの前で演じる。

- 1) 宮沢賢治の短編や日本各地の民話を読み、討論を行い、理解を深める。
- 2) 今度は留学生全員に自国の民話や昔話を作文、推敲というプロセスを通して完成させ、みんなの前で発表させる。その際、その物語を象徴するような絵を数枚準備させる。

- 3) 最終的には同一国の学生グループを編成し、複数の話の中から一つを選び、紙芝居を作成する。その際、各国の文化的背景や特徴が反映されたものになるよう注意させる。
- 4) できあがった各国版の紙芝居は、全員で視聴し、わかりにくい所など再チェックした上で、大学で催される短期留学生の「さよならパーティー」の出し物として、多くのゲストの前で発表する。

2-4. 2学期目^(注2)の内容

2学期目は「多様な視点を獲得する」という目標に基づき、次のようなプロセスで「8分程度のスキット」を企画、作成し、1学期と同じく「さよならパーティー」の際にゲストの前で演じる。

- 1) 学習者の希望を取り入れて、太宰治、夢野久作、森鷗外などの小説^(注3)や英語対訳付きの『誤解される日本人』『完璧すぎる日本人』などいろいろな角度から日本を紹介した本を選び、読解の前にブレインストーミング的活動^(注4)を交えながら、読んでいく。
- 2) グループワークとしては、1) の読解で理解した日本人の行動や考え方を踏まえて、日本社会・文化の長所、短所をブレインストーミング的手法で討論、認識する。それをもとにテーマを決め、ストーリーをつくる。その際にその物語を象徴するような絵を場面によって数枚準備させる。
- 3) 2) をもとに、「8分ほどのスキット」にまとめる。台本を作成し、小道具を作り、演技の練習をする。
- 4) できあがった各グループのスキットは何度かリハーサルを重ね、1学期と同じく短期留学生の「さよならパーティー」の際に、ゲストの前で披露する。

3. ブレインストーミングの手法

ブレインストーミングとは1章で述べたように「少人数のグループによって自発的にアイデアを生み出し、それを蓄積していき、最終的にある課題を達成するための方法」であるといえる。つまり、ブレインストーミングはグループワークの1形態であり、「アイデアを探るための第一歩として有効な自由形式の発想法であり、課題をあぶりだして解決し、思考の幅を広げる」という特徴を持っている。

この章ではグループワークとしての「ブレインストーミングの特徴」に焦点をあて、その手法について述べる。

3-1. ブレインストーミングとは何か

授業実践のツールとして用いるブレインストーミングにはどのような特徴があるのだろうか。もともとブレインストームという言葉はマディソン街の広告マン、Alex F. Osborn が1950年代に作り出した造語であり、創造的に思考することを目的とした手法としてブレインストーミングを紹介した^(注5)。Osborn はブレインストーミングの特徴として次の4つの条件をつけている。

- 1) ブレインストーミング中は、ある意見に対して批判したり、反対意見を述べたりしない。それぞれの意見に対する判断はのちの振り返りの際に行う。
- 2) 風変りなアイデアや空想的なアイデアも排除しない。

- 3) アイデアの量は多ければ多いほどいい。アイデアの量は質につながる。
- 4) あるメンバーのアイデアに他のメンバーのアイデアをさらに蓄積していき、より充実したアイデアを構築していく。マインドマップを描きながら進めていくこともある。

この4つの条件を満たすことにより、ブレインストーミングの特徴が明らかになると思われる。つまり、ブレインストーミングは、「アイデアや意見をまとめ、ある結論を出す」ことだけが目的なのではなく、「ありふれた単純なアイデアから、より深く創造的なアイデアまでさまざまなアイデアを自由に提出し、蓄積し、組み合わせることによって、課題を見極め、より独創的なものを作る」ための手法だといえよう。

3-2. ブレインストーミングで何が変わったか

私は今までに日本文学や異文化を題材にした読解の後、いくつかの問題を出し、まずはグループ内で討論をした後で意見や感想をまとめさせ、それをクラス全体で発表させるというやり方をとっていた。いわゆる教師主導のグループワークといってもいいだろう。しかし、グループ内で活発に意見が出ているかという点、そうでもないことも多かった。なんとかグループの一人ひとりが積極的に討論に参加し、知恵を絞って結論を出すという学習者主体の方法はないものかと思索している時にブレインストーミングに出会った。まず、Osbornの4原則を徹底し、次に教師が明確なテーマあるいは課題を設定し、制限時間（課題によって3分～20分）内に課題を遂行させるというやり方をとってみた。その結果の発表も時間制限と字数制限を設けることで、以前のグループワークより学習者の活動に集中性が出てきたように感じた。何らかの制限があると、そこにゲーム性が加わり、必死になるようだ。

しかし、オズボーンの4条件を学習者に習慣づけることは最初かなり難しかった。こうしなさいと口で言っても、学習者からはそう簡単にさまざまな創造的アイデアは出てこない。だが、このやり方を繰り返し行うことで、学習者が課題をよりの確に見極め、以前よりも多様で創造的なアイデアや意見を出すことができるようになったことは事実だ。一番難しいのは条件の4で、適切にアイデアを蓄積し、構築していく方法を身につけることである。グループのリーダーや日本人学生のあり方、マインドマップの活用も含めて今後の課題である。

4. 実践のデザイン

ここからは2学期に行う日本社会・文化に関する「スキット」作成の課題を例にとり、その目的と手順、実際の活動について具体的に述べる。

4-1. 目的と手順

この授業の留学生は上に述べた4カ国15名ほどである。授業では、まず、日本だけでなく各国の社会文化も含めて話せるようなトピックを教師が提示する。そのトピックに沿って4、5人のグループで討論し、スキットの企画、作成、発表という一連の課題の遂行を通して、より多様な視点を獲得するという目標を設定した。各グループの中には最低1名のボランティア参加の日本人学生に入ってもらい、適宜質問に答えたり、討論に加わってもらったりした。

学習者が日本社会・文化のどの側面をスキット化するかを探し出すツールとしては先に述べたブレインストーミングの活動を用いた。今回のスキット作成の目的は「日本の社会において一見短所とされていることも視点を変えれば長所にもなりうる」ということを発見することである。スキット作成の課題に行く前に、ウォーミングアップのブレインストーミングとして、「日本の旅館」をテーマにし、①「最高の旅館」と②「最低の旅館」についてそれぞれ数枚の絵とナレーションをつけて、発表させる。次に「最低の旅館」の具体例をそれぞれ隣のグループに渡す。③それを渡されたグループはその「最低の旅館」をその状況や条件は大きく変えずに「最高の旅館」へと変える方法を考える。そのためには視点の変換と新しい発見が必要となる。④最後に③によって作られた「最高の旅館」をストーリーにしてCM化する。その後、どのCMが一番良かったか等の振り返りを行う。この流れはいろいろなトピックに応用することができる。たとえば、「最高に魅力的な日本人」と「最低の日本人」、「最高にうまくいったバーベキューパーティー」と「最悪のバーベキューパーティー」などである。そして、「最悪の・・・」案を「最高の・・・」案に変えるというブレインストーミング③の活動には、より多様で創造的な視点と新しい発見が必要とされる。この最後のブレインストーミング③④の活動時間は15分～20分程度とする。その制限された時間内で、彼らの頭の中にあるあらゆる情報、知識を使って他のメンバーとアイデアを出し合い、旅館のCMに仕上げていく。そのプロセスを学習者の記録係は記録し、教師はグループ間を回りながら観察する。

下にこの授業の全体の流れと今回使用したウォーミングアップ用ブレインストーミングの例を図にまとめた。

図1 授業全体の流れ

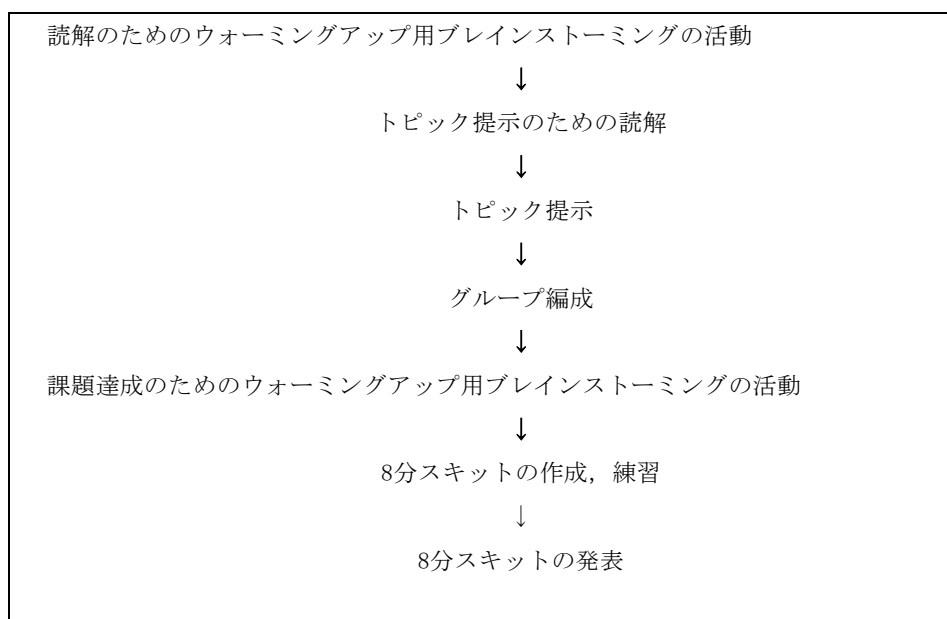
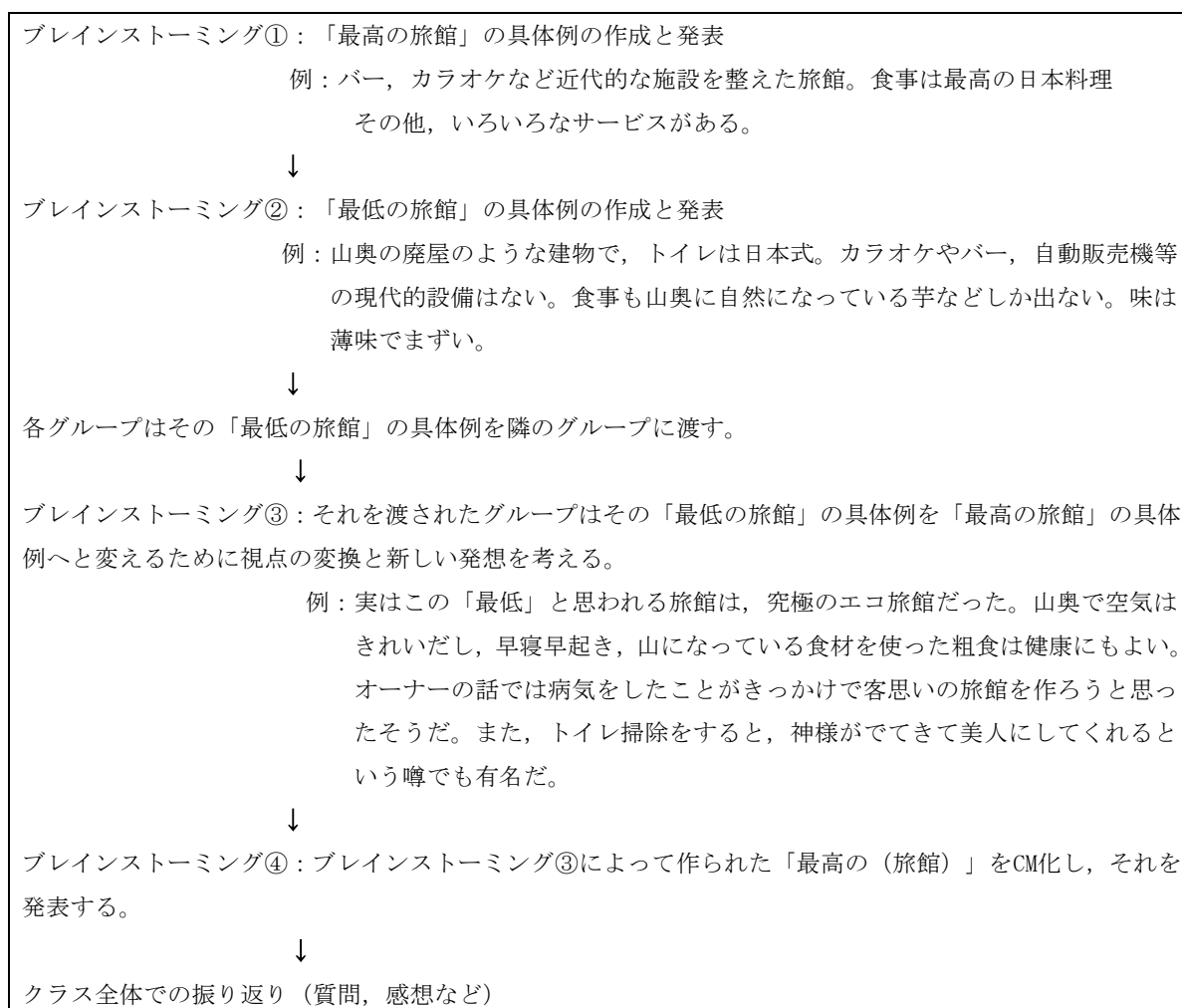


図2 ウォーミングアップ用ブレインストーミングの1例



発表後はクラス全体の質問やコメントを通して自分たちのストーリー（CMの内容）を振り返らせる。聴く側にその趣旨がうまく伝わらなかった場合，どこにその原因があるのかをグループでまたはクラス全体の反省会で話し合うことで，次のさらなる発想に繋げていくというしくみができれば理想的だ。実際はなかなか創造的なアイデアの提案まではいかず，感想会にとどまっているのが現状である。

4-2. 「スキット」作成と活動成果

「最低の旅館」を「最高の旅館」へと変えるブレインストーミングの過程で得た経験を利用して，最終的に各グループで8分間スキットを作成する。この作成にはブレインストーミングの時とは異なり，授業以外にも十分な時間を与える。このスキット作成の目的は，最初は「最低の・・・」だと思われたものが，視点の転換と新しいアイデアの発見のもとで，最終的には「最高（とまではいかずとも）もしくはごく普通の・・・」にもなり得たという結論を導き出すことである。場面や状況，視点は各グループで考える。今回のトピックとしては「最低の日本人」を「最高の（あるいはごく普通の）日本人」に変えるとい

う課題を設定した。今回は、話し合いの結果、「最低の日本人」の例として「曖昧な言い方をする日本人」が最も多く学生の側から提出され、ほかに「本音と建前をあまりにもはっきりと使い分ける日本人」「乗り物の中で老人に席を譲らない若者」などが出された。出来上がったスキットは小道具作成や演技の時間をかけて完成し、クラスで発表のリハーサルをした後、留学生の送別会の出し物として発表した。^(註6)

5.ブレインストーミングの課題

今回の実践発表に至る過程を通して見えてきた課題には以下のようなものがある。

- 1) ブレインストーミング中についていけない学習者はいないか。いるとすればどのような指導をするべきか。日本語力の違いや学生の個性によって、よく話す学生とあまり話さない学生がいるのは確かである。その場合、考えられる指導法としては、各グループのリーダーにはなるべくすべてのメンバーが意見を述べられるよう配慮するように事前に指導しておくこと、また、日本人学生には日本語の問題で話ができない学生には英語を使って説明したり、必要な日本語を教えたりするように頼んでおくこと等がある。では、教師の役割は何であろうか。各自が自律的に進めていく活動であることが大切なので、教師としてグループに働きかけることはあっても、個人に対してもっと話すよう促したり、意見を求めたりすることはなるべくしないようにしている。あくまでもグループの中で解決できるよう配慮している。他にもまだ教師としてできることがあると思われるので、検討課題として取り組んでいきたい。
- 2) 「最悪の・・・」と「最高の・・・」とあるが、トピックの立て方が極端ではないか。確かに極端な感じは否定できないが、ブレインストーミングの際には、多少ははっきり違いが指摘できるようなトピックを立てるほうが学生にとってはアイデアが出やすいという傾向もある。ただ、スキット作成のほかにも、読解には読解のための、作文には作文のためのブレインストーミング活動のトピックの立て方があると思われるので、また、違ったトピックの立て方も考える必要があると感じている。
- 3) すべてのグループにおいて発表にあるような「視点の変換」や「新しい発見」ができていないのか。確かに「視点の転換」や「新しい発見」をすることは決してたやすいことではない。この活動において最も難解な部分であることは明らかである。だが、これができなければ、ブレインストーミングの活動を使った授業の意味がなくなってしまふといっても過言ではないほど重要なプロセスだと言える。指導者としてできることは、1つでも2つでもいいから、何か新しい視点や発見を探し出すように指導することだ。議論が煮詰まっているようなグループがある場合は、そこまでの議論のプロセスを聞き、「たとえば、こういう異なった視点でも考えられるんじゃないか」というようにヒントを与えることもある。そうすると、不思議なことに、与えたヒントから、私が思っていたようなものとは全く違ったアイデアが出てくることもある。まだ試行半ばの指導法であるので、今後の課題として大切に考えていきたいと思っている。

6. まとめ

これまでに、日本または日本人についてのスキットをまとめるという課題と、それに至るまでのツールとしてのブレインストーミングの実践について述べてきたが、ここで、語

学教育、特に討論におけるブレインストーミングの定義についてまとめておきたい。

ブレインストーミングとは、1章でもふれたが、「少人数のグループによって自発的にアイデアを生み出し、最終的にある課題を達成するための方法である」と定義される。何かトピックを与えられて、意見やアイデアを述べ合い、最終的に課題を達成するには、そのトピックについて豊富な知識や情報を得る必要がある。その準備段階として資料の読解をし、グループ内の情報のやり取りによって各自が知識を補充する。その段階になって初めて「視点の変換」や「ユニークな発想」ができるようになり、「新しい発見」が生まれてくるのだと思う。語学の教室におけるブレインストーミングとはこの過程を促進し、議論を活発にする役割を果たすグループ活動の一つであると定義できるのではないだろうか。

最後に、私が担当している「異文化講読」とブレインストーミングの関係について触れたい。各学期末の課題を完成するまでに、留学生の国の「紙芝居」の場合は日本と世界各国の民話を、また、日本社会・文化を題材にした「スキット」の場合は、断片的にはあるが、太宰治、森鷗外などの小説や日英対訳のついた本など様々な角度から日本を紹介した本を選び、読解の前にもブレインストーミング的活動を交えながら、読ませてきた。その際のブレインストーミングの役割は、これから読んでいく文章に対してさまざまな視点や意見が持てるように学生の発想力を刺激することである。一言で言うと、この授業の目的は柔軟な発想力によって異文化あるいは自国の文化についても多様な視点をもってもらうということに尽きるだろう。

今後の課題としては、これらの読解と課題制作のプロセスの中でどうしたら、より効果的に議論を活性化するためにブレインストーミングの手法が使えるのか、また、語学教育において具体的にどのような手法がありうるのかについて実践と研究を深めていきたい。

注

- (1) Hall Houston(2006), Hayriye Kayi((2006), Brian Cullen((1998), Leslie Bobb-Wolff(1996)を参照。
- (2) 本学の短期留学生は1学期(4月～8月初旬)の4月来日の留学生と2学期(10月～2月初旬)の10月来日の留学生の2種類があり、留学期間も多くは1年(両学期)だが、1学期のみ、あるいは2学期のみ在籍の者もいる。
- (3) これらの本をすべて読破するのは不可能なので、テキストとして『Jブングク マンガで読む 英語であじわう 日本の名作文学12編』(「Jブングク」制作プロジェクト編)を使用した。その後、物語の分かりやすく重要だと思われる部分のみ抜き出して本文の読解を行った。
- (4) 例えば夢野久作の「少女地獄—何んでも無い」の読解の場合、主人公の持つ特殊な魅力を理解するため、「あなたにとって魅力的な人とは」「あなたの魅力とは」等の質問のほかに「今までで最高に魅力的だった友達」「今までで最低の友達」等のトピックをグループで話し合い、最後に主人公の魅力がどこにあるのかをもう一度考えさせてみた。
- (5) エレン・ラプトン(2012:16)はオズボーンの提唱するブレインストーミングについて次のように象徴的に述べている。

これは、1つの課題に向けてあらゆる方向から同時に攻撃を仕掛け、連射式の質問

で課題を撃破し、有効な解決策を引き出す手法を意味する。オズボーンは、どれだけ手強い課題でも、十分な思考の砲火を浴びればいつかは降伏すると考えた。また、どれだけ融通が利かず、因習に捕われた人でも、適切な状況の中に身を置けばイマジネーションを発揮するとした。

(6) 付録資料として、出来上がったスキットの1つのスクリプトを付けた。

参考文献

- (1) エレン・ラプトン(2012)『問題解決ができるデザインの発想法』ビー・エヌ・エヌ新社
- (2) Hall Houston. (2006). A Brainstorming Activity for ESL/EFL Students. *The Internet TESL Journal*, Vol. XII, No.12, <http://iteslj.org/> (2012年5月12日)
- (3) Hayriye Kayi. (2006). Teaching Speaking: Activities to Promote Speaking in a Second Language. *The Internet TESL Journal*, Vol. XII, No.11, <http://iteslj.org/> (2012年5月12日)
- (4) Brian Cullen. (1998). Brainstorming Before Speaking Tasks. *The Internet TESL Journal*, Vol. IV, No.7, <http://iteslj.org/> (2012年5月12日)
- (5) Leslie Bobb-Wolff. (1996). Brainstorming to Autonomy. *English Teaching Forum*, Vol.34 No.3, <http://eca.state.gov/forum/vols/vol34/no3/endex.htm> (2012年5月11日)

付録資料

十日の真夏

*登場人物は架空の人物である。

第1幕

リー:(座った状態でため息をつき、立って観客を見る) みなさん、初めまして。僕は中国からの留学生です。実は今日はみなさんに聞いてもらいたいことがあるんです。それは・・・。

パク:(外から入ってくる) ああ、あっち。マジで溶けそう。あああ。(リーを見る) はあ、お前、まだ悩んでんのかよ。男だったら、いいかげん腹をくくって告白しろよ。もうこの交流プログラム始まって七日目だけ。あと三日しかないんだよ。ていうか、暑いのに俺をいらいらさせるなよ。

リー:(また、ため息をつき、座る) パクはもてるからそんなこと言えるんだよ。僕みたいなブサイクには、ナオは無理だよ。パクも聞いたでしょ。あれ・・・。

第2幕 (回想シーン)

(二人の前にチャコとナオが座っている)

チャコ: ねえねえ、ナオは留学生の中で好きな男の子いないの。

ナオ:(後ろにいるリーとパクを見る) ええ。ああ、うん、さあ、チャコはどうなの。

チャコ:(質問を待っていたように) 当然パクくんでしょ。あんなにカッコいいし、ぱりイケメンやし。面白いし、みんなパクくん、好きだもん。やっぱナオもそうでしょ。

ナオ:(ため息をつき、観客を見ながら) パク君か。私はあんまり・・・。実は、初めて会った時から、(最後の名前はほとんど聞こえない声で) リー君が・・・。

チャコ:(食いつきそうに) もう、なに悩んでるの。でしょ。でしょ。

2012 年度 WEB 版『日本語教育実践研究フォーラム報告』

ナオ：(またも後ろにいる二人を気にする) あ……。実は……。いや、うん、そうよ！私もパク君が好き！

(後ろにいたリーとパク。リーはナオの話聞いて絶望する)

リー：やっぱり、僕なんかじゃだめなんだ。(走って外にでる)

パク：おい、急にどうしたんだよ。おい！

第3幕

(また、1幕の場面に戻る)

パク：でもな、お前が言ったじゃん。最初会った時からナオとは結構いい感じだったって。両想いでまちがいないって。マジそれが本当なら、ナオも結局典型的な日本人って訳よ。素直に本音も言えねえ。俺は日本人のそういう所がいやなんだ。

リー：そうかな。

(チャコが突然入ってくる)

パク：どうしたの、ほかの日本人たちはみんなご飯食べに行っちゃったよ。

チャコ：(叫ぶ感じで、目を力いっぱい閉じて、顔は下を向いている) パク君！パク君はイケメンだし、モテるから、私なんかに興味ないかもしれないけど、素直に言います。好きです！付き合ってください。

パク：(少し間をおいて) 素直で元気でいいじゃん。いいよ。今日から俺らはラブラブだ。(チャコの手をつかんで) さっそくメシ食いにいくか。今日はラブラブカツ丼だ。じゃ、お先に失礼するぜ。(リーにウインクする。リーは驚いて何もいえない)

第4幕

(ナオが走っていく二人を見ながら、何か決心したように入ってくる)

ナオ：あの……。リー君、ちょっと、いい？

リー：(驚いて立ち上がる) あ、は、はい。

ナオ：この前はごめんなさい。(丁寧な感じで謝る) あの時は本当のことを言えなかった。それで、実は、私……。(ナオは泣きそうな顔をしている)

リー：(再び、観客のほうを見て) 彼女が頑張ってる本音を言おうとしている。ここで彼女に言わせたら、僕は本当に男失格だ。勇気を出すんだ。僕も素直になるんだ。本音を言うぞ。

ナオ：実は、私、リーくんが……。

リー：待って！僕に言わせて。僕、最初に会った時からナオのこと好きだった。ブサイクな僕だけど、(膝をついて) 付き合ってください！

ナオ：(泣きながら) ありがとう。私も最初から素直だったらよかったね。

(リーとナオは手をつなぐ)

リー：みんな、ありがとう。みんなが見てくれなかったら、きっと素直になれず、勇気も出せなかった。ありがとう。僕も彼女とラブラブカツ丼食べにいきます！！